

町と町人

？近世の都市はどんなようすであったか

- ・近世になると、多数の都市がつくられ、その中心は**城下町**であった。城下町は、それまで在地領主として農村部に居住していた武士が、兵農分離政策で移住を強制され、あわせて商人や手工業者(諸職人)も営業の自由や屋敷地にかけられる年貢である地子免除の特権を得て定着した。

[城下町]

- ・将軍や大名の城郭を核とし、武家地・寺社地・町人地・かわた町村など身分ごとに居住する地域がはっきりと区分された。
- ・**城郭と武家地**は城下町の面積の大半を占め、政治・軍事の諸施設や家臣団・足輕の屋敷がおかれた。
- ・**寺社地**には、有力寺院や神社を中心に多くの寺社が集められ、宗教統制の中心としての役割をになった。
- ・**町人地**は町方とよばれ、商人・手工業者が居住し営業をおこなう場であり、面積は小さいが、全国と領地とを結ぶ経済活動の中核として重要な役割を果たした。町人地には、町という小社会(共同体)が多数存在した。

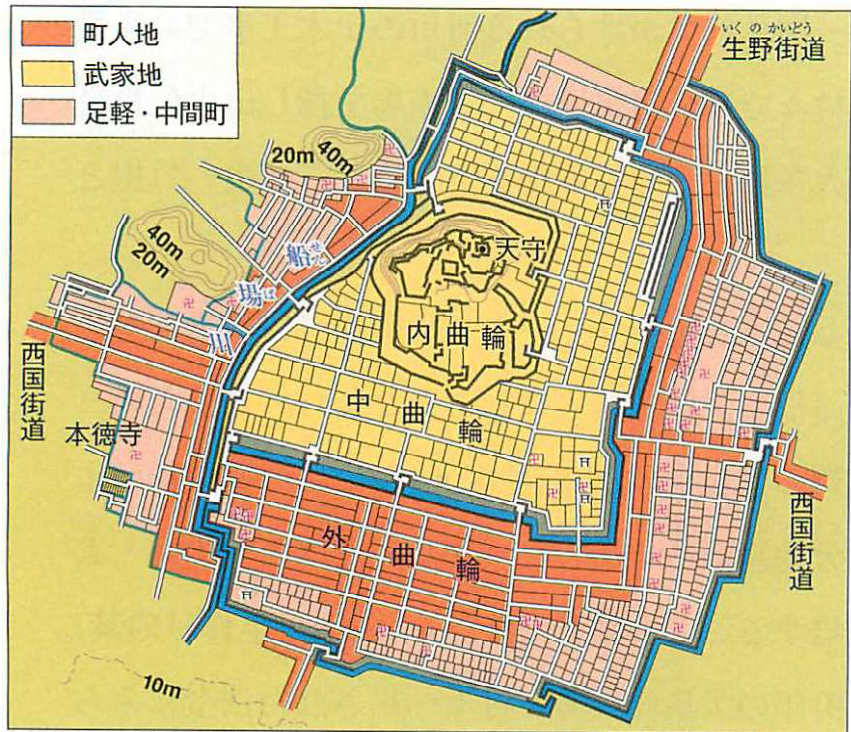
？町人はどのような生活をしていたか

- ・町には村と類似の自治組織があり、商人や手工業者である住民の営業や生産・暮らしを支えた。
- ・町内に町屋敷を持つ(1**家持**)の住民は町人とよばれ、町人の代表である**名主・町年寄・月行事**などを中心に、**町法(町掟)**にもとづいて運営された。
 - ・町には田・畑がなく、町人は百姓にくらべて重い年貢負担をまぬがれたが、上下水道の整備、城郭や堀の清掃、防火・防災など都市機能を維持する役割を、夫役である**町人足役**や貨幣を支払うことになわされた。
 - ・町には宅地を借りて家屋を自分で建てる(2**地借**)、家屋ごとや多くはその一部分を借りて住む(3**借家・店借**)、また商家の奉公人など多様な階層が居住した。地借や借家・店借は、地主の町人に地代や店賃を支払うほかに負担はないが、町の運営には参加できなかった。

近世16 p189

※多くの町で、家持の町人は住民の少数を占めるにすぎなかった。

※都市には城下町のほかに、港町・門前町・宿場町・鉾山町などがあるが、どの場合も都市社会の基礎には町が存在した。



城下町姫路 天守を中心とする内曲輪の城郭を中曲輪の武家地が取りかこむ。外曲輪の南側に町人地が広がり、そのまわりや東側には足輕・中 間町や寺町がみえる。

農業

近世の農業は、一組の夫婦を中心とする小規模な家族が、狭い耕地に細やかな労働を集中的に投下し、面積当たりの収穫量を高くするという、零細ではあるが高度な技術を駆使する小経営をおこなう点に特徴がある。幕府や大名は、こうした高い生産力をもつ小経営とこれを支える村を、社会の富を生み出す基礎とした。このために、検地などにより小経営の実態や耕地の増加を調べた。

17世紀初めから幕府や大名は大規模な治水・灌漑工事を各地で始め、用水の体系を整備した。また商人の資力も利用して、海浜の浅瀬・湖沼・荒蕪地などを耕地として開発させ(新田開発)、そこに新たに百姓を移住させて村をつくらせた。その結果、全国の耕地は2倍近くに拡大し、年貢米の増収をもたらした。

農業に用いられる道具(農具)は、人が用いる鋤・鍬・鎌などをはじめ、牛・馬など畜力による耕起用の犁など、耕耘・除草・収穫などに応じて多様に発達した。こうした農具には鉄が用いられ、これを生産・修理する城下町の職人(鍛冶職)が村々をまわった。

p191

※芦ノ湖を水源とする箱根用水や、利根川から分水する見沼代用水などが知られる。

農業のつづき

肥料は刈敷と厩肥が基本であった。刈敷は、村内や近くの入会地から共同で得られる草である。作物は、多くを年貢にあてる米がもっとも主要なものであったが、小麦や粟・稗・蕎麦など自給用の雑穀、麻・木綿など衣料の原料、近くの城下町向けの野菜・果物、江戸・上方など遠隔地に向けた蜜柑・茶などの商品作物、養蚕のための桑など、地域の条件にもとづいて多様に生産された。

村は、水路・溜池などの用水や入会地の維持・管理、田植えや収穫時の共同労働(結)など、百姓の農業経営になくてはならない役割を果たした。



国絵図に描かれた椿海 下総の国絵図に「椿海」という湖がみえ、諏訪湖の3倍の面積があったと考えられる。江戸町人が請負人になり、幕府も資金援助をして干拓を進めた結果、1673(延宝元)年に工事は完了し、18カ村の新田村落が生まれた。(国立公文書館蔵)

林業・漁業

国土の大半が山でおおわれる日本では、村や城下町の多くが山と深い関わりをもった。まず山は、建築や土木工事に不可欠な材木を豊富にもたらした。なかでも良質な大木を多く抱える山地は、幕府や大名の直轄支配とされ、伐り出された材木は、城郭や武家屋敷の建築に用いられ、民間にも大量に払い下げられた。また尾張藩や秋田藩などでは、藩が直轄する山林から伐り出された材木が商品化し、木曾檜や秋田杉として有名になった。材木産地の山を抱える村には、杣と呼ばれ

近世17 p192

※有力な都市商人が資金を投下して開発する町人請負新田が、17世紀末から各地にみられた。干潟を干拓した新田開発の例としては、備前児島湾や有明海、また湖沼干拓では下総椿海のものが有名である。

p192

る専門の職人や、材木の運送などにたずさわる労働者(日用)が、百姓として多数居住した。

山の一部は、村の共有地、あるいはいくつかの村々が共同で利用する入会地とされた。村の共有地や入会地では、肥料となる刈敷や、牛馬の餌である秣が採取され、また百姓の衣食住を支えるさまざまな草木が採集された。また山は、化石燃料が普及する以前の、ほぼ唯一の燃料エネルギー源である薪や炭の供給源であった。これらの薪や炭は、近隣の城下町などで大量に販売された。



木曾の大木伐り出し(木曾山材木伐出之図) 木曾の山中で、檜などの大木を伐り倒す様子。杣が根元に伐り込みを入れ、多くの日用たちが力をあわせて引き倒す。

近世の漁業は、主要な動物性蛋白源として、また肥料(魚肥)に用いるために魚介類を獲得することをめざして、多様に発達した。海・河川・湖沼で、さまざまな漁法や漁具・漁船を用いておこなわれ、網漁を中心とする漁法の改良と、沿岸部の漁場の開発が進んだ。中世末以来の網漁の技術は、摂津・和泉・紀伊などの上方漁民によって全国に広まった。こうして得られた漁獲物は自給用に消費されるほか、鮮魚のまま近くの都市で売られ、あるいは塩や日干しによる保存措置が講じられ、なかでも干し鮑や鰯節などは全国規模で流通した。海辺の漁村では、城下町の魚問屋と取引する網元などの有力者を中心とする漁民たちが、漁場を占有した。こうした漁業や流通には、城下町や三都の魚問屋の資金が大きな役割を果たした。

手工業・鉱山業

近世は、職人の時代でもあった。職人は、生産のための道具や仕事を自分で所有し、弟子を抱える、小規模ではあるが独立した手工業者である。近世の手工業は、農業と同じように、細やかな労働を集中して、多様に分化した道具を駆使する高度な技術をともなつて発達した。

近世の初めに職人とされたのは、幕府や大名に把握され、城郭や武家屋敷、寺社などの建築、都市の建設、鉱山の経営、武器の生産などを担う大工・木挽や鉄砲鍛冶などに限られていた。これらの職人は町や村に住んで、幕府や大名に無償で技術労働を奉仕し(国役と呼ぶ)、百姓や町人の役負担を免除された。

17世紀の中頃になると、民間のさまざまな需要に応じて、多様な手工業生産が都市を中心に急速に発達した。これらの生産に従事する職人たちは、業種ごとに仲間や組合をつくり、都市部では17世紀末頃までに借家人などとして定着した。

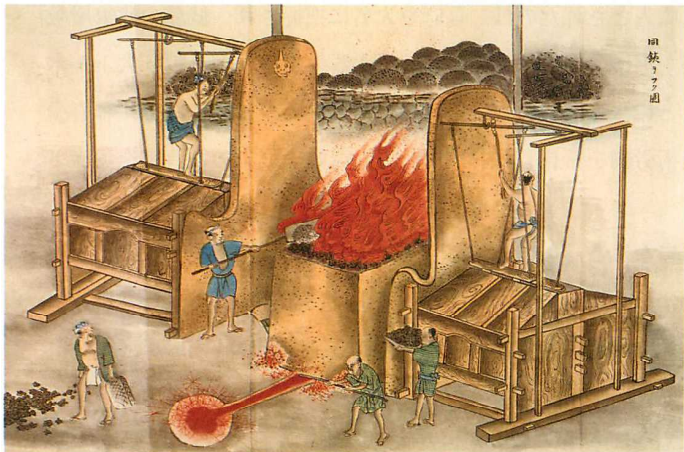
一方、村々にも大工などの職人がいた。その他、零細な家内手工業が早くからみられた。その代表は麻・木綿などの製糸や織物・紙漉・酒造などである。戦国時代末期に綿作が朝鮮から日本に伝わると、木綿は従来の麻とともに庶民の代表的衣料としてまたたくまに普及した。木綿の生産は、村々の女性労働による伝統的な地機(いざり機)を用いたものが中心であった。また紙漉による和紙の生産は、楮をおもな原料とし、**流漉**の技術とともに、全国の村々で広まった。和紙は大量に生産され、行政や経営、また情報の伝達や記録の手段として必需品となり、学問・文化の発達にも大きく貢献した。こうした村々の手工業は、百姓が農業の合間におこなう仕事(農間渡世)として把握された。

鉱山業では、中世の終わりから近世の初めに、海外から新しい精錬や排水の技術が伝えられ、また製鉄技術が刷新された。そして各地では競って金銀銅の鉱山の開発がめざされ、**鉱山町**が各地で生まれた。なかでも銀は、世界でも有数の産出量に達し、東アジアの主要な貿易品となった。

17世紀後半になると金銀の産出量は急減し、かわって銅の産出量が増加した。銅は、拡大する貨幣の需要に応じるとともに、長崎貿易における最大の輸出品となった。鉄は、砂鉄の採集による**たたら精錬**が、中国地方や東北地方を中心におこなわれた。そこでつくられた玉鋼は商品として全国に普及し、多様な道具に加工された。

鉱山で使われた鉄製のたがね・のみ・槌などの道具や、掘削・測量・排水などの技術は、治水や溜池・用水路の開削技術に転用された。その結果、河川敷や海岸部の大規模な耕地化が可能となり、農業・手工業生産の発展に大きく貢献した。

近世18 p192



てんびん
天秤たたら図
両側のふいごで中央の炉に空気を送り込み、高熱を発生させて精錬し、純度の高い玉鋼を生産した。(東京大学工学・情報理工学図書館工4号図書室A蔵)

●商業

商人は本来、自分の資金で仕入れた商品を、みずから買い手に売る小経営をいう。こうした小経営の商人は、中世以来近世を通じて広く存在した。近世の初期に平和が実現し、交通や流通が安全におこなわれるようになると、まず豊富な資金や船・馬など商品の輸送手段、蔵などの貯蔵施設を所有する**豪商**が活躍した。彼らは、堺・京都・博多・長崎・敦賀などを根拠地とし、朱印船貿易や、まだ交通体系が整備されない時期に、地域間の大きな価格差を利用して巨大な富を得た。しかし、鎖国により海外との交易が制限され、一方で国内において陸上・水上交通が整備されていくと、これらの豪商は急速に衰えた。

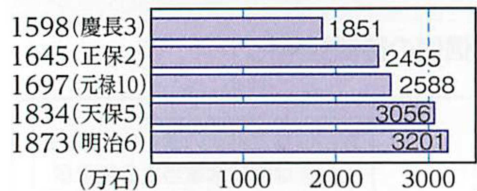
17世紀後半になると、全国の商品流通は三都や城下町などの都市を根拠地とする**問屋**が支配するようになった。問屋は、生産地の**仲買**から商品を受託し、これを都市の仲買商人に手数料(口銭)をとって卸売りした。生産地の仲買は、仕入れた商品を遠隔地の問屋に販売を委託し、また都市部の仲買は、都市内の問屋や市場で仕入れた商品を、武家や**小売商人**などに売り、利益を得た。また小売は、市場の仲買などから購入した商品を消費者に売る商人で、常設の店舗、路上の店、もち歩いて販売する零細な**振売**など、さまざまな形で商売を営んだ。問屋や仲買は、都市や生産地で業種ごとに仲間・組合と呼ばれる同業者団体をつくり、独自の法(**仲間掟**)を定めて、営業権を独占しようとした。

p195

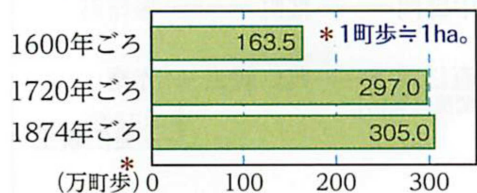
※これを初期豪商と呼ぶこともある。京都の角倉了以や茶屋四郎次郎、摂津平野の末吉孫左衛門、堺の今井宗薫らが有名である。

2 新田開発 しんてん かいぱつ ➡ p.180

官	代官見立新田	幕府代官が適地を見立てて開発させたもの
官	藩営新田	藩が主導し、開発を推進
民	村請新田	一村ないし複数の村で新田開発を申請
官	町人請負新田	町人が資金・技術を出し開発(新田地主)



▲ ⑨ 石高の増加 いしかうのぞうか 『岩波 日本史辞典』



▲ ⑩ 耕地面積の増加 けいちめんせきのぞうか 『100 時間の日本史』

◀ ⑧ 新田開発の奨励 しんてん かいぱつのしょうれい

耕地の増加は年貢の増収につながるため、幕府や藩は百姓の年貢減免措置などを行い新田開発を奨励した。

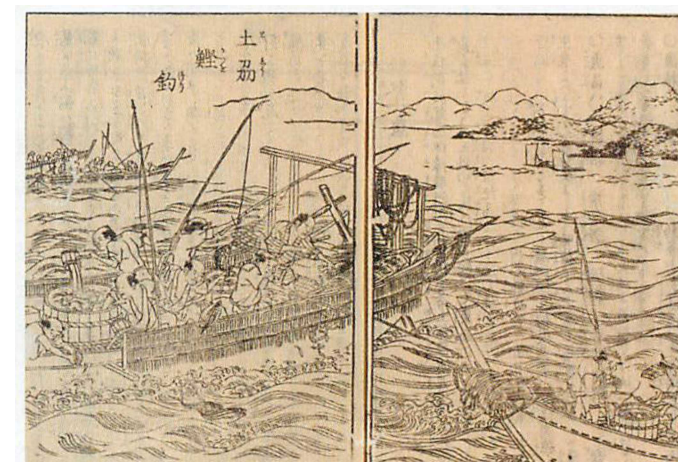
環境 新田開発と自然災害

江戸時代は国内の大開発時代であった。当時、田畑の肥料の中心は刈藪・草木灰(→p.112)だったため、大規模な新田開発によって大量の草木が必要となり、山林の樹木が過剰に伐採された。その結果、河川へ土砂が流出し、洪水や地滑りが多発するようになった。そのため幕府は、1666年に諸国山川掟を発布し、木の根の採取などを禁止した。



(千葉 一松神社蔵)

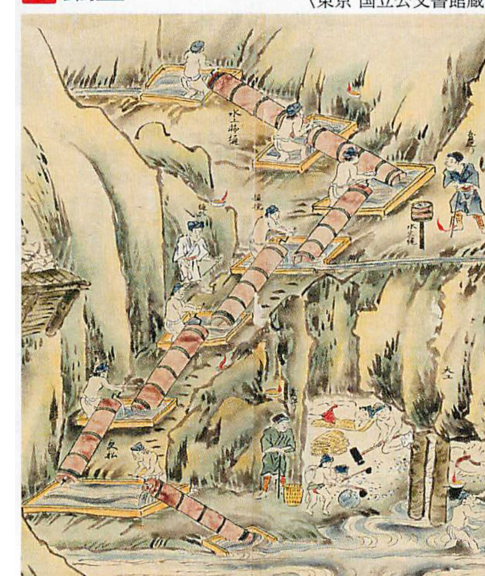
◀ ⑫ 房総での地曳網漁 ぼうそうでのじびきあみ
千葉県房総半島に上方の網漁の技術を伝えたのも紀州海民であった。それを房総で独自に改良したのが大地曳網漁で、おもに鰯をとり、干鰯や魚油の原料とした。醤油醸造も鰯子に伝わり特産品となった。



◀ ⑬ 土佐の鰹漁 どさのかつお
鰹は船から生きた鰯をまき、集まる鰹を竿一本でつり上げる漁法で行う。鰹は、薩摩・土佐・紀州・房総が好漁場であるが、紀州海民はその漁場をまわり、漁法と船団の組織化を各地に広めた。

(東京 国立国会図書館蔵)

B 鉱山



◀ ⑮ 佐渡金山での採掘 さだのきんざんでのさいくわく
幕府は佐渡金山を直轄領として採掘に力をいれた。日本最大の金山であったが最盛期は短かった(→p.178)。採掘の際には酸欠や湧水の問題があり、坑内作業はきびしい環境であった。排水や採掘の技術は、新田開発(→p.162)や治水工事に転用されていた。



◀ ⑯ 銅の精錬 どうのせいれん
銅商住友氏が開発した伊予の別子銅山(現愛媛県新居浜市)は、幕府へ御用銅を納めるまでに成長し(→p.178,182)、長崎貿易の主要な貿易品となった。

5 製塩業 せいしんぎょう ➡ p.125



▲ ⑧ 行徳塩田の製塩釜 ぎやうとくしんぎょうのせいしんかま
江戸周辺では、江戸川流域の行徳が塩の供給地であったため、幕府が直轄領とし、軍事上食塩確保の点もあって厚く保護した。上の図は、大きな吊釜に鹹水(塩分濃度の高い水)をいれ、水分を蒸発させて塩を得るようす。



▲ ⑨ 塩廻船 しんかいせん
江戸時代に瀬戸内海沿岸の赤穂、竹原などで入浜塩田が発達した。これらの塩は塩廻船で江戸や大坂に送られた。